

シリーズ「〈家族〉のかたちを考える」によせて

1982年に多様な分野の研究者が集り、比較家族史学会（当初は比較家族史研究会）が発足しました。1988年刊行の『シリーズ家族史1 生者と死者：祖先祭祀』以来、「シリーズ比較家族」、「家族研究の最前線」とシリーズ名は変わってきましたが、本学会はこれまで毎年開催されるシンポジウムの成果を監修し、世に問うてきました。これは他の学会にはみられない、比較家族史学会独自の試みだと自負しています。

21世紀に入って家族を取りまく状況は大きく変化しています。今日では家族を当たり前のこととして語るのが難しくなっています。家族のなかで生まれても、最後は一人で死んでいく人が増えています。家族に関する言説も多様化しています。メディア上に「家族の絆」を賞賛する声があふれている一方で、頻発するDVを問題視して家族を暴力の温床とみなす人もいます。「血のつながり」を絶対視して生殖医療技術に頼る親もいれば、多様な「育ての親」のもとで育っていく子どももいます。若い世代では同性婚など多様な家族のあり方を求める人が増えていますが、依然としてLGBTQ+をめぐる動きに違和感を抱く人もいます。

新シリーズ「〈家族〉のかたちを考える」では、学会の原点である歴史と地域という二つの比較軸の両立を目指します。広くグローバルな視野が求められる現代において、法学・社会学・文化人類学・歴史学・教育学・人口学・民俗学など専門領域を異にする研究者が集まり、学際性を前面に出す比較家族史学会らしいオリジナリティあふれる研究成果を公刊したいと考えています。

2020年から世界は新型コロナウイルスに翻弄されたが、今日、調査と学会活動も従来のように活発化しています。現在、家族が直面するさまざまな問題に正面から向き合うと同時に、歴史からも多くの経験を学び、〈家族〉のかたちを考えるための新しい視点を読者に提供したいと思います。

2023年3月

比較家族史学会